

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520071

研究課題名(和文) 西洋における否定神学の成立と展開

研究課題名(英文) The Formation and Development of Negative Theology in Western Philosophy

研究代表者

今 義博 (KON, Yoshihiro)

山梨大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：30115315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は西洋における否定神学について、その源流からクザーヌスに至るまでの展開を明らかにすることである。神はこの世の何ものにも属さず、われわれは神を思考や言葉では決して規定することができないということに基づいて、否定神学は神を何でないかを語る(否定する)ことによって神に接近しようとする。そのためにわれわれは思考と言葉を超えなければならない。そのことから、否定神学はわれわれの神についての肯定的な接近、あるいは沈黙による接近とどのような関係にあるかが問題になる。本研究はそれらの問題を西洋の古代中世の思想に探ったものである。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate the development of the negative theology from its origin to Nicolaus Cusanus in Western philosophy. In terms of the fact that God belongs to nothing in the world and can not be defined by the words or thoughts, the negative theology attempts to approach God by speaking of Him only what He is not (negation or apophysis). For this reason we must be beyond our thinking and speaking in order to get some truth about God. From this it is called in question how the negative theology is related to the affirmative approach to God or to a silence for God. Such things about the negative theology in ancient and medieval Western philosophy are considered in this study.

研究分野：新プラトン主義哲学

キーワード：否定神学 肯定神学 キリスト教 新プラトン主義 神秘主義 象徴神学

1. 研究開始当初の背景

20世紀後半から21世紀にかけて、中世の否定神学は現代の哲学者たちの注目を集めてきた。その背景には第二次大戦後、理性や実存によって人間精神や社会構造を説明できるという立場が疑われるようになったことがある。ジャック・デリダや構造主義者、ポスト構造主義者と呼ばれる哲学者たちは、世界は確固たる中心があるのではなく、むしろ中心の欠如によってしか構造化されないとし、否定神学的なモデルによって世界を説明しようとした。

またハイデッガー、オイゲン・フィンク、デリダ、レヴィナス、マリオンというような現代の有力な哲学者たちの思想が皆、否定神学と深いつながりを有していることも、否定神学が現代哲学の主要テーマの一つとなった理由である。

しかし近年、否定的表現の困難さもあって、否定神学は乗り越えられるべき古い立場であるという主張も現れてきている。否定神学に対する一種の揺り戻しであろう。

しかし、世界的に見ても、肯定にせよ否定にせよ、否定神学に関する今日の議論は十分に正しい知識に基づいているのかどうか疑問である。ことにわが国には否定神学の研究の蓄積は皆無に等しく、残念ながら、否定神学の正しい理解が得られているとは思われない。今日、最もしばしば議論の土台とされる偽ディオニュシオス・アレオパギテスの否定神学についてさえ、その正しい理解に基づいた議論は皆無に近いというのが実情である。

2. 研究の目的

本研究は西洋古代における否定神学の諸源流から近世のクザーヌスに至るまで、否定神学に関する重要な思想や思想家を取り上げて、それぞれの特色、意義、役割等を解明し、西洋における否定神学の包括的な歴史的研究を行うことを目的とする。

本研究で扱う否定神学を歴史的に5段階に分け、各段階にそれぞれ1年間を振り分けて、5年計画で順次遂行される。各年度の研究目的は以下の通りである。

[平成22年度]

否定神学の諸源流についての研究。ユダヤ教(旧約聖書)、古代ギリシア哲学(クセノファネス、ソクラテス、プラトン)、アレクサンドリアのフィロン、グノーシス主義、パウロを取り上げ、それぞれの否定神学の源流としての意義、特徴、否定神学への方向性と可能性を明らかにする。

[平成23年度]

アパメイアのヌメニオスとアルピノスを取り上げ、中期プラトン主義において初めて否定神学が概念的に規定され、方法論として明確になったことを明らかにし、さらにプロテ

イノスとプロクロス等の新プラトン主義において否定神学が確立される過程とその内実を解明する。特にプロクロスが apophatike theologia (否定神学) という術語を造ったことの意義と、その特徴、さらに偽ディオニュシオス・アレオパギテスの否定神学への方向性と関係を明らかにする。

[平成24年度]

アレクサンドリアのクレメンス、エイレナイオス、オリゲネス、ナツィアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス等のキリスト教教父たちに共通する否定神学の特徴、それぞれの教父における否定神学の個別的特徴・発展の諸相を明らかにする。

[平成25年度]

歴史上初めて否定神学を肯定神学・象徴神学・神秘神学などと関連づけて体系化した偽ディオニュシオス・アレオパギテスの否定神学、それを独自に救済史に適用した証聖者マクシモスにおける否定神学について研究する。

[平成26年度]

東方世界において展開されていた否定神学を初めて西方世界へ導入したエリウゲナをはじめ、シャルトル学派、トマス・アクィナス、マイスター・エックハルト、さらにクザーヌスにおける否定神学を取り上げて、西洋中世に展開された個々の否定神学の特徴や意義、相互関係、展開の歴史などを解明する。

3. 研究の方法

本研究は、研究対象となる西洋の諸思想・諸思想家の否定神学思想を精密に深く掘り下げて吟味するとともに、これまでの研究文献・資料、特に諸外国の最近の研究成果を徹底的に収集・調査して実証性を高め研究内容を充実させ、また本研究課題に関係する外国の研究者たちと意見交換をすることにより最新の知見を研究に盛り込んで、密度と完成度の高い研究成果を上げたいと思っている。

各年度の具体的な研究方法は以下の通りである。

[平成22年度] 西洋における否定神学の源流についての研究

その源流を次の5つに分類して、それぞれの思想の特徴を明らかにするとともに、それぞれの源流が否定神学とどのような関係にあるか、また諸源流の間の関係などを解明する。

(1) ユダヤ教の伝統

旧約聖書の「出エジプト記」と「申命記」に述べられているように、ユダヤ教では唯一神ヤハウェー以外の神の崇拜を禁じ、神の比類なさや超越性に基づいてあらゆる偶像崇拜を禁じている。ユダヤ教におけるこれらの思想が否定神学の形成にどのようにつながるかを明らかにする。

(2) 古代ギリシア哲学

まず、古代ギリシアにおいて、クセノファネスは理性の立場から伝統宗教の擬人神観と相対主義的多神教を厳しく批判して一神教を主張したが、そのクセノファネスの思想はどのような意味で否定神学の源流となったかを明らかにする。また、ソクラテスは、「神々については、われわれは何も知らない。神々そのものについても知らないし、また名前についても、いったい神々が自分たちを何と呼んでいるのか、知らないのだ」(『クラテュロス』400d)と述べて、神に対するわれわれ人間の認識の限界を鋭く指摘し、さらにプラトンは宇宙の制作者(デーミウルゴス)について(『ティマイオス』29C)、また哲学の根本問題(第七書簡)についての不可説性を主張した。これらの主張が後の否定神学の形成にとってどのような意義を持つのかを究明する。

(3) アレクサンドリアのフィロン

ユダヤ人思想家であるアレクサンドリアのフィロンは旧約聖書的思想の伝統の影響とプラトン哲学の影響を受けており、それら二つの源泉から神の不可解性や隔絶性を明確に主張し、否定神学の形成に貢献した。のみならず、フィロンは後世のキリスト教教父たちの否定神学にも大きな影響を与えた重要な思想家であり、彼の否定神学の歴史的役割と意義について研究する。

(4) グノーシス主義

グノーシス主義は神についての否定的言説と神についての不可説性を主張し、プロティノスにも影響を与えるなど、否定神学の形成に対しても一定の役割を果たしたと思われるが、同時にその思想の限界も明らかにされるであろう。

(5) パウロ

パウロのアレオパゴスの丘での説教で言及される「知られざる神(使徒言行録17, 23)」という表現のもとにあるであろう、神の不可説性の思想を解明し、それが後世のキリスト教教父たちの否定神学の源泉になりえた所以を明らかにする。

[平成23年度] 中期プラトン主義と新プラトン主義における否定神学の研究

否定神学は中期プラトン主義において初めて概念的に規定され、方法論としても明確になり、さらに新プラトン主義のプロティノスにおいて方法論として形式的にも実質的にも確立されたと思われる。

本年度の研究は、否定神学の諸源流と、アパメイアのヌメニオス(根源的な善の起源をエペケイナ(彼岸)において否定的に叙述した)、アルビノス(神についての洞察が諸々の否定によって可能となることを説き、またアリストテレスの<不動の動者>の概念を否定神学に導入して新しい展開を示した)などを経て、プロティノスにおいて否定神学が明確に規定され、方法論として確立されていく過程を明らかにする。プロティノスはプラトンの<有のかなた>の概念に基づいて<

一者>を様々な仕方で否定的に特徴づけ、また<一者>の探求において徹底的な認識批判を遂行して否定神学を確立したと思われるが、本研究はプロティノスの内容豊かで深く強力な方法論の内実を究明したい。

さらにプラトンの萌芽的な否定神学的思想要素とプロティノスの否定神学を受け継いで、論理的にも方法論的にも形而上学的にも整備し深化させたプロクロスの否定神学について研究する。プロクロスが apophatike (否定) という語と theologia (神学) という語を思想史上初めて結合して apophatike theologia (否定神学) という術語を造ったことの意義と、彼の否定神学の特徴、さらに偽ディオニュシオス・アレオパギテスの否定神学へつながる方向性と関係を明らかにする。

[平成24年度] キリスト教教父における否定神学の研究

キリスト教教父における否定神学は、偶像禁止という命題、反グノーシス主義の論争やその他の護教活動、ギリシア哲学になかった新しいキリスト教的救済史の根拠づけと展開、キリスト教という宗教の形而上学的理論武装などからの要請から、独自の展開を示す。本研究では、アレクサンドリアのクレメンス、エイレナイオス、オリゲネス、ナツィアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス等を取り上げて、キリスト教教父における否定神学の諸特徴について研究する。本研究で取り上げる教父たちの否定神学はプロティノスから大きな影響を受けているので、特にその影響関係に注目しつつ、それぞれの教父の否定神学の特徴や独自性を明らかにしたい。

[平成25年度] 偽ディオニュシオス・アレオパギテスと証聖者マクシモスにおける否定神学の研究

偽ディオニュシオスが否定神学を肯定神学、象徴神学、神秘神学という新しい方法論的概念に体系的に結びつけることによって、また否定神学そのものをより深化したことによって、彼の否定神学は後世の西洋の否定神学全体の模範となった。偽ディオニュシオスにおける<否定>の概念のほかに、aphairesis(除去)や steresis や elleipsis (欠如・欠乏・欠陥)などの関連概念も比較検討することにより、偽ディオニュシオスの否定神学の特徴や体系性や意義を解明する。証聖者マクシモスは、偽ディオニュシオスの否定神学を受容・継承してそれを後世に伝えたのみならず、それを新たに救済史論の展開に応用した意義や後世のキリスト教教義に与えた影響を解明したい。

エリウゲナが偽ディオニュシオスとマクシモスの両方の否定神学を受容することで、東方キリスト教圏で発展した否定神学を初めて西方に導入したことに注目し、三者の関連も顧慮して、エリウゲナの否定神学の独自性を解明する。

[平成26年度] 西洋中世から近世のクザーンヌに至る否定神学の研究

偽ディオニュシオスとマクシモスの否定神学を西方に導入したエリウゲナ、12世紀のシャルトル学派、13世紀スコラ盛期のトマス・アクィナスとマイスター・エックハルト、近世のクザーンヌにおける否定神学を研究する。エリウゲナについては偽ディオニュシオスとマクシモスの否定神学の受容と継承の面と、彼独自の理論的体系化の面を解明したい。シャルトル学派については偽ディオニュシオスとエリウゲナとの影響関係に注目して、この学派の否定神学の特徴を明らかにする。トマスについては偽ディオニュシオスの『神名論』に対する註解を讀解してトマスの否定神学の特徴を解明する。エックハルトの否定神学は神秘主義によって独特の特徴を獲得するので、その特徴、および彼の否定神学と神秘主義の関係や意義を明らかにする。

否定神学はスコラ哲学の中で形式化した。クザーンヌの脱中世的な独創的思想の展開の中で、新しい相貌を見せる。西洋近代以降の否定神学の基盤をなすことになるクザーンヌの否定神学とその特色と意義を追求したい。

4. 研究成果

本研究は西洋における否定神学について、その源流からクザーンヌに至るまでの、つまり西洋の古代から中世における展開を明らかにすることであった。結論として、本研究は古代から中世における否定神学のさまざまな諸相や特徴や展開を明らかにすることができた。

否定神学は、既存の肯定的な神(真理)認識を否定的に乗り越えてより深く神(真理)に接近しようとするダイナミックな活動であるため、否定神学的努力は常に既存の哲学や神学を革新しようとする契機を内包している。否定神学の歴史的展開を解明しようとする本研究は、古代中世に哲学者や神学者がいかに深く否定神学の道を追求したか、また彼らの否定神学的思索の営みがいかに広く時代の神学や哲学に影響を与えたか、そういうことをこれまでになく詳細に解明することができたと思う。

一方、研究を進めた結果、さらに研究されるべき哲学者や思想家の存在も次々に明らかになり、新たな課題もはっきりすることとなった。

この研究計画はこれまで我が国では試みられたことのない規模の研究であり、また各年度ごとに計画された研究内容は非常に密度の濃いものであった。そのために計画の全年度にわたってテキストの分析・読解と概念的・哲学史的研究とに忙殺され、年度によっては計画が必ずしも十分に実行されない

部分もあり、各年度ごとに研究成果を論文にまとめるには至らなかった。この点は反省せざるをえない。しかし全体としては概ね計画に従って研究を進めることができたと思われるし、研究成果は今後、逐次、学会・学会誌に発表できるであろう。またやがては専門書の形にまとめて刊行するつもりである。

ハイデッガー、E.フィンク、レヴィナス、デリダ、マリオンなど現代の有力な哲学者たちが否定神学に対して大きな関心を寄せていることによって、否定神学は現代哲学の主要なテーマの一つになっている。このことは本研究とは直接関係のない問題ではあるが、いわば西洋の古代中世の遺産である否定神学が、なぜ近世という時代に衰えた後、現代においてホットなテーマとなったのか、否定神学はどのように現代哲学とかかわりうるのか、あるいは現代哲学は否定神学の遺産をどのように継承・発展しうるのか、という点について一定の見通しを本研究によって得ることができたことは一つの成果であった。将来的には、本研究を踏まえて、現代の否定神学をめぐる哲学研究に一石を投じることができよう。この点も本研究の成果と考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

[学会発表](計 0件)

[図書](計 1件)

『イスラーム哲学とキリスト教中世 III 神秘哲学』、竹下正孝、今 義博、ほか9名、岩波書店、2012年、357+26P.(pp. 173-209)

6. 研究組織

(1)研究代表者

今 義博(KON, Yoshihiro)

山梨大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号: 30115315

(2)研究分担者

なし